

ホルヴァートの「人間の喜劇」『男のいない村』

——祖国回帰と反ナチスを巡って——

伊藤 富雄

はじめに

1936年11月、ホルヴァートはそれまで書いてきた「民衆劇」と決別し、新たな戯曲を書く計画を立て、その新たな戯曲のテーマや構想に関し「人間の喜劇」というタイトルのメモを残している。そのメモについてはすでに拙稿で述べたことがあるので詳細は省くが¹⁾、ホルヴァートはその中で、それまで発表してきた「世間の言い方にならえば成功を収めた」作品は「習作」にすぎず「撤回」する旨を述べている²⁾。さらにそのメモの端に、この「人間の喜劇」の作品群として『ポンペイ』と『男のいない村』という具体的な作品名が挙げられ、さらに以下の七つの素材の分類がおこなわれている。

1. 太古（人間社会の成立）
2. （精神の勝利，没落に対する勝利）
3. （文化の崩壊と新しい精神，キリスト教の勝利）
4. （理性に対する精神の闘い）
5. （神に対する闘い，理性の勝利）
6. （個人主義，集団主義）
7. （善と悪）

いずれも従来の喜劇の素材とは異質な内容のものであり、ホルヴァートの「人間の喜劇」が目指す方向性を推測させるもので興味深い。そして実際に「人間の喜劇」として完成させた二つの作品の内『男のいない村』は二番目に挙げられている「精神の勝利，没落に対する勝利」、ないしは四番目の「理性に対する精神の闘い」に、『ポンペイ』は第三番目に挙げられている「文化の崩壊と新しい精神，キリスト教の勝利」に該当すると言えよう³⁾。

さてこうした新たな構想の下に書かれた二つの喜

劇の第一作が「七場からなる喜劇」の『男のいない村』である。ホルヴァートは『最後の審判の日』完成直後の1937年4月、ハンガリーの作家K. ミクサートの小説『ゼリシュチュエ村の女たち』を戯曲化して出版する契約をウィーンの出版社と結び、同年5月には「ヨーゼフシュタット劇場」で初演することになっていた⁴⁾。ブダペストの新聞には「ヨーゼフシュタット劇場」のような大劇場での上演であれば、すでに半ば成功したのも同然だと評された。それまでナチスによる上演禁止措置などで落ち込んでいたホルヴァートが、この作品の上演に大きな期待をかけていたことが推測される。しかしながら理由は不明だが、結局「ヨーゼフシュタット劇場」での初演は中止となり、同年9月24日にプラハの「新ドイツ劇場」で初演されている。

本稿ではホルヴァートの「人間の喜劇」構想を基に、ホルヴァートの祖国ハンガリーへの回帰と反ナチスという観点から、この作品を分析するものである。

I

ホルヴァートは1936年にはポーマルシュの『セヴィリヤの理髪師』をモデルに『フィガロの離婚』を、1937年にはプラウトゥスの喜劇『ベルシャ人』をモデルに『ポンペイ』を書いている。そして『男のいない村』の作品も先に述べたようにハンガリーの作家K. ミクサートの小説を戯曲に改作したものである。ホルヴァート自身は作品の前書きに自作とK. ミクサートの小説との関係を次のように述べている。

この作品は偉大なハンガリーの小説家の小説『ゼリシュチュエ村の女たち』の戯曲化ではない。

そうではなくて、その小説の個々のモチーフを基に喜劇を書こうとしたにすぎない。この喜劇の登場人物は小説の登場人物とは何ら関係ない⁵⁾。

[S. 466]

E. クーンに依れば、K. ミクサーの小説『ゼリシュチェ村の女たち』は彼の最も有名な小説の一つで、映画化され、ラジオドラマやテレビドラマ化されたものも多く、ホルヴァートの戯曲はその中の6番目のものだとのことである⁶⁾。またホルヴァート自身はこの喜劇の内容を1937年9月にプラハの新聞に以下のように紹介している。

この作品は歴史物の喜劇で、対トルコ戦争時代のハンガリー王マティアス・コルヴィヌスの宮殿が舞台となっている。中世の汚職事件の発端と結末、前提となった事情やその影響などが一中略一共に批判することなく描かれている。有能な王は自分の勇敢な兵士を男のいない村へ出産促進のために派遣することを拒否する。なぜならその村の女性たちが酷く醜いからである。しかしながら兵士派遣のもくろみは策略を用いて少なくとも一部分は成功する。しかしこれ以上は初演を前にして述べたくはない。

[S. 654]

このホルヴァートの説明を補足すれば、男のいない村を領地としている伯爵が共同浴場の主人の知恵を借りて、兵士派遣を依頼すべく、村の女性の代表を、それも実際の村の女性ではなく、他の村から美人をそろえて王のもとに送り込む計画を立てる。しかしながらその代表の一人に伯爵夫人が別の意図で紛れこんでいたことから、物語は思わぬ展開をするが、最後は王からの兵士派遣を約束され、また別居状態だった伯爵夫妻も和解し、大団円を迎えるという内容の喜劇である。

ところでホルヴァートは彼の「人間の喜劇」という新しい構想による作品群の第一作として、なぜ祖国ハンガリーに題材を取った作品を書いたのだろうか。それまでドイツでドイツ語作家として活躍したホルヴァートが亡命を余儀なくされ、さらにそれま

での作品を「撤回」して新たな出発を目指そうとして、まず取り上げたのがハンガリー王を巡るドラマであったことは、祖国ハンガリーに対するホルヴァートの態度や想いの変化、また逆にドイツに対する態度や想いの変化が見て取れるのではないだろうか。さらには彼がこの作品へ込めたメッセージが見えてくるのではないだろうか。そうした疑問に答えるため、まずはホルヴァートと祖国ハンガリーとの関係を年代を追って見ていくことにする。

II

ホルヴァートは自伝の中で「私は身長が1.2メートルになった時にブダペストへやって来て、1.21メートルになるまでそこで暮らした」と書いている⁷⁾。それは1908年から1909年の時期である。次にホルヴァートがハンガリーに住んだのは1916年から1917年にかけてで、彼はプレスブルク（ブラティスラバ）の上級学校に通っている。さらに1818年から1919年にかけてはブダペストに住み、1918年10月に勃発した「秋の薔薇革命」と呼ばれている革命を体験し、大きな影響を受けている。その後はウィーンを経てドイツへ渡りミュンヘン大学で演劇学を学んだ後、ベルリンを中心に作家活動に専念する。1933年1月、ナチ政権誕生と同時に彼の作品はドイツでの上演が禁止される。また彼の身辺も危うくなったため、ホルヴァートは各地を転々としながら14年振りにブダペストに戻っている。1936年からはザルツブルク近郊のヘンドルフに居を構えていたが、その年にもブダペストを訪れている。そして1938年3月の訪問が彼の最後の訪問となる。

こうしたホルヴァートとハンガリーとの関係を整理すれば、第一期、すなわち1919年から1929年はホルヴァートが祖国ハンガリーから次第に離れていった時期、第二期、すなわち1929年から1933年はホルヴァートのドイツでの活躍の時期（1931年のクライスト賞受賞がその頂点、1933年の作品の上演禁止がその終焉）、第三期、すなわち1933年から1938年は徐々にハンガリーに回帰していく時期（1936年11月、ホルヴァートが「人間の喜劇」を書こうと決心し、それまでの成功した作品を破棄した時期がその決定

的な時期) だと言えるだろう。

第一期に当たる1908年から1909年にかけてホルヴァートが住んでいた場所は1514年のハンガリー農民蜂起指導者ドージャ・ジェルジュの陣営となった場所だと言われており、ホルヴァートはこのドージャを主人公にした五場からなる戯曲の草稿も残している。ホルヴァートの伝記作者ヒルデブラントはホルヴァートが当時通っていたブダペストの学校で習ったハンガリー史にヒントを得て書いたものだとしている⁸¹。

一方E. クーンは、ドージャに率いられたハンガリー農民蜂起は通常「革命」とは呼ばないのに、ホルヴァートのドージャ断片のメモには「革命」という言葉が散見される点などから、1918年のブダペストでの革命をもとに歴史作品『ドージャ』に仕上げるつもりだったとしている。またドージャのことを知ったのはホルヴァートが愛読していたハンガリーの革命的民族詩人アディ・エンドレの詩を通じてであり、1918年にホルヴァートはアディ・エンドレの作品を読む若者のサークル「ガリレオ・グループ」と出会い、その影響を受けていた事実を指摘している⁸²。ホルヴァートがハンガリーの歴史に関心を抱き、作品化を試みたとはいえ、作品は完成しないままメモに終わってしまった事実、それ以降はたとえば『3018高地の暴動』『スラデク』といったようなドイツのアクチュアルなテーマを取り上げた作品を書いていった事実、その後ハンガリーには14年近くも戻らなかった事実などを考え合わせれば、ホルヴァートがこの時期に祖国ハンガリーから次第に離れていったことは明らかである。

第二期の1929年、ベルリンに住んでいたホルヴァートは『登山電車』のベルリン上演での成功を足がかりに、1930年から1932年にかけて代表作の『イタリア風ガーデンパーティーの夕べ』『ウィーンの森の物語』『カージミルとカロリーネ』『信仰 愛 希望』を相次いで発表。特に『イタリア風ガーデンパーティーの夕べ』は二ヶ月の間に20回も上演される成功をおさめる。そして1931年にはクライスト賞を受賞し、新進劇作家として脚光を浴びる。この時期ホルヴァートはまさに「ドイツ人作家」であるかのように振る舞っており、バイエルン放送局とのイン

タビューで「ハンガリー国籍」であることを仄めかされるのを嫌い、「私はいかなる場合でもドイツの文化圏に帰属する人間だと思っています」とも述べている⁸³。まさにホルヴァートのドイツでの活躍の時期と言えよう。

第三期はホルヴァートが徐々にドイツからハンガリーへ回帰していく時期であるが、その直接の契機となったのは1933年1月のナチ政権誕生によるホルヴァートの作品上演禁止処分、さらに2月の突撃隊による両親宅の搜索であろう。ホルヴァートは身の危険を感じてドイツを去り、オーストリアのザルツブルクからウィーンへと亡命生活を余儀なくされる。ただこの時点ではホルヴァートは第三帝国の焚書や非ドイツ系作家の迫害に抗議する作家や知識人たちの運動とは一線を画し、作家オスカー・マリア・グラーフによる運動参加の要請を拒否し、そのために「突然ハンガリー国籍を意識し始めたドイツ人のクライスト賞受賞者」として辛辣な批判を浴びている。またクラウス・マンが亡命先のアムステルダムで出した雑誌『ザムルング』への参加要請に対しても、政治とかかわっている雑誌とはもはや一切の共同の仕事をするつもりはない、と書き送っている⁸⁴。

1934年3月、ホルヴァートは再度ベルリンへ赴いているが、この時点でも彼はナチス系の新聞に対し、『登山鉄道』は共産主義ではなく、反共産主義であり、それゆえマルクス主義を信奉する新聞からは一部の例外を除き「嘲りを受け、弾劾された」と弁明しているし⁸⁵、1934年7月にはナチ傘下の「ドイツ作家帝国同盟」に加入している。しかしながら1935年9月、ついにホルヴァートはドイツを去ってウィーンへ戻り、その後二度とドイツの土を踏むことはなかった。1936年にはザルツブルク近郊のヘンドルフで『戦場から帰ったドンファン』『男のいない村』『最後の審判の日』『フィガロの離婚』などを完成させ、さらにトーマス・マンに「この数年来最高の書」であると賞賛された『ファシズム国家における人間』を描いた小説『神なき青春』を執筆する。ほぼ同時期にホルヴァートはハンガリーのハトヴァニー伯爵夫人の知己を得て、ハトヴァニー伯爵の援助・保護を受ける可能性を手に入れる。伯爵はホルヴァート

が愛読していたハンガリーの詩人アディの友人であり、かつまたパトロンでもあった。1937年11月24日、ホルヴァートは友人クソコルに次のように書き送っている。

この地で私の小説に感激した手紙を数通もらったが、中にはハトヴァニー伯爵からのものもあり、特にそれが嬉しい¹⁷⁾。

さらに翌日には直接伯爵宛に「ご招待感謝いたします。すっかり感激しています。と申しますのも私は倒錯した人間でして、ドイツ語でものを書いているとはいえ、再び故郷へ帰りたいたいと思っているのです」と、祖国ハンガリー回帰の想いを告白している¹⁸⁾。ホルヴァートを取り巻く状況・情勢の変化がドイツから祖国への回帰を余儀なくしたとは言え、彼の中に息づいていた祖国への想いが一気に吹き出した感がある。そしてそれ以降のホルヴァートは「人間の喜劇」と銘打たれた二作品を初め、『神なき青春』『現代の子』などの作品に明らかに見られるようにファシズム国家、具体的にはナチ支配下のドイツに批判的な作品を発表し続けることになる。

1938年3月13日、ホルヴァートはウィーンからブダペストへ行き、ブダペストのホテルへ泊まり、翌日ハトヴァニー伯爵邸へ招待されている。そしてそれがホルヴァート最後のブダペスト訪問となった。その後パリへ出向いたホルヴァートは6月1日、事故死を遂げる。弟ラヨスは亡くなったホルヴァートの紙入れの中にハトヴァニー伯爵宛の封筒を見つけたことを、後日伯爵に報告している¹⁹⁾。

Ⅲ

さて「人間の喜劇」の第一作目となった『男のいない村』の評価を巡っては、例えばW. フーダーによって「プスタから来たハンスザックス演劇、ドナウ河畔でのハッピーエンドのたくらみと恋」としてあっさり片付けられ²⁰⁾、M. プロートも「幾つかの粗野な冗談、共同浴場の接客女、裸の男たち、まっとうとは言えない職業などが登場するメルヘン、しかし一方ではまた愛の雰囲気の中でのメルヘン、

暖かい、穏やかな夏の夜のメルヘン」だとしている¹⁷⁾。確かに実際の作品の中でも共同浴場の支配人は、村の代表の女たちが王の離宮に招待されたことを「これはメルヘンのようなものさ」と語るし、女主人公である伯爵夫人も「かもしれないわ」と同意する場面もある。プラハ初演後の新聞の批評でもマティアス・コルヴィヌス王時代の共同浴場のシーンは「魅力ある見せ場」だと書いているものもある¹⁸⁾。さらにB. シュトラウスは、それまでのホルヴァートの複雑な意識はヒトラーの権力掌握後、実に単純なものになってしまい、作品の時代批判的な意味合いが薄れてしまったとして、この作品も観客受けを狙った「深みのない作品」だと否定的な評価をおこなっている¹⁹⁾。しかしながらホルヴァートがこの喜劇の基とした小説の作者K. ミクサーが「社会に対する責任をわきまえない階級に対して有罪判決を下す」ことで知られていた時代批判的な小説家であったこと²⁰⁾、またホルヴァートがそれまでの作品を撤回し、「人間の喜劇」という新たな構想の作品群の第一作として書いた作品であること、あるいは作品の主人公ハンガリー王マティアス・コルヴィヌスの歴史的な存在意義などを考慮すれば、この作品が決して単なるメルヘンではないこと、少なくともホルヴァートはそれを目指したのではないことが分かる。

作品の時代は「対トルコ戦争の時期、初期ルネッサンス」となっていて、第一幕の舞台はハンガリーの王宮である。主人公はハンガリーの若き王マティアス・コルヴィヌスである（ハンガリーではフニャディ・マーチャーシュと呼ばれている）。マティアス・コルヴィヌスは有力な二大貴族の妥協によって若くして王位に就いている。その後彼は大貴族に反対する中小貴族を味方に、有力な大貴族を次々とうち破り、中央集権的な権力を手にしていく。そして王は「正義」を原則に司法や行政機関の改革を初めとする社会改革をハンガリー史上例を見ないやり方で実現する。たとえば側近の有力貴族に向かって、農奴たちを搾取し、苦しめるのを止めなければドナウ河に投げ込む、と脅したと言う。また王は貴族が農民・民衆に対し弾圧・抑圧をおこなっていないかを調査すべく、変装して民衆の中を歩き回ったとの

信仰が生まれ、「正義の王」とも呼ばれている。さらに王は貴族に相応しくないと判断した場合には別の人物を新たな貴族に取り立て、「真の貴族を私は人間の心の中に求め、それ以外のどこにも求めはしない」と語ったと伝えられており、貴族の新たな資格要件として、氏素性よりも徳や忠誠心、勤勉さ、といった人間性を重視している。こうした王の考え方はイタリアのフマニスムの学問や芸術から受け継いだと言われており、この時期に王は外国の、主としてイタリアの人文主義者、科学者、芸術家たちをブダペストの宮殿に招聘したり、大学の創設や「コルヴィナ」と呼ばれる図書館の建設をおこなってヨーロッパの名声を博し、ハンガリーは当時のヨーロッパの精神的、文化的中心へと発展した。まさにマティアス・コルヴィヌス王ほどハンガリーの歴史上有名かつ評価の高い王はいないと言える。しかしながらドイツだけでなく、ヨーロッパの歴史という観点から言っても、例えばプロイセンのフリードリッヒ大王が遙かに有名であるし、観客の関心という点から言ってもフリードリッヒ大王を主人公にする方が有利だと思われる。しかしホルヴァートが敢えてフリードリッヒ大王ではなく、ハンガリーの王マティアス・コルヴィヌスを選んだのには、それなりの理由があったのである。ホルヴァートは先ほどの「人間の喜劇」の中で次のように書いている：

私は墮罪を犯したのです。かつて「一押し二押し」という戯曲を書いたことがありますが、それは新プロイセンの影響を受けて墮落し、妥協してしまったのです²¹⁾。

「新プロイセンの影響を受けて墮落し、妥協」した事の反省の上に立ったホルヴァートが作家としての再生を図り、新たな喜劇の主人公を選ぶにあたってプロイセンのフリードリッヒ大王を選ぶはずはなかったのである。フリードリッヒ大王の代わりにハンガリーの王を選んだこと、それはホルヴァートの祖国ハンガリーへの回帰を如実に物語るものである。

ホルヴァートの喜劇の王マティアスは歴史上の王同様にフマニスムを信奉し、イタリアのボローニ

ャから科学者を宮殿に呼び寄せたり、魔女の存在などの非科学的な迷信を退ける。また美食に溺れ、私服を肥やすだけの腐敗した総督・貴族を追放し、その代わりに「人間性」の点で優れている役人を後任に据える。たとえば第三幕で王は近衛兵に扮して総督の腐敗・墮落振り突き止め、その場で総督を逮捕させ、他の宮廷吏を代わりに総督に任命する。

総督：(いきりたって)何をなさるつもりです？私は貴族ですぞ、王。

王：だからなおさら悪いのだ—中略—(大尉に向かって)国民の名において！連行せよ！

[S. 489]

こうした王の措置に警備の衛兵も思わず「王様万歳！」と叫んでしまう。ここには歴史上の「正義の王」マティアス・コルヴィヌスのエピソードを借用しながら、K. ミクサート同様に「社会に対する責任をわきまえない階級に対して有罪判決」を下し、中世のフマニスムの思想が野蛮行為や迷信を排除し、「国民の名」において民主的な政治を行っていることを示しながら、ユダヤ人迫害に見られる、言われなき人種差別や野蛮な侵略行為を行っている20世紀のファシズム政治、ナチ政権を厳しく批判しようとするホルヴァートの意図が見て取れる。さらに言えば当時のホルヴァートの目指す新しい作品の根幹をなす精神も見えてくる。「今日作家は何を書くべきか」という文章で、ホルヴァートは検閲制度について述べた後で、次のように書いている。

検閲に関して言えば、真の検閲しか存在しません。すなわち作家の良心がそれなのです。そして良心を放棄することは決してあってはならないのです²²⁾。

王マティアスが貴族の資格要件として、持って生まれた氏素性ではなく、その人物の徳や忠誠心、勤勉さに求めたごとく、ホルヴァートは作家としての資格要件を何よりも作家の「良心」に求め、時の権力者や制度に迎合することなく、「物書きの淫売」(「人間の喜劇」)になることなく、自らの作家の

「良心」に照らした作品を生み出そうとしたのである。

また喜劇の王の人間性を強調するために歴史上の王と異なる描き方もされている。つまりホルヴァートの王は当時のハンガリー帝国の外交政策上の最も強大な脅威であったトルコに対する攻撃的な態度は見られない。しかし歴史上の王は好戦的とは言えないまでも、トルコ攻略のため数度の出兵をおこない同時代の人々から時として「第二のアッチラ」と呼ばれたのに対し、ホルヴァートの王は戦争で荒れ果てた国土を再建しようと努力する「正義の人」に変えられている。

更に歴史上の王が中央集権的な権力者であったのに対し、ドラマの王は総督の逮捕の際にも見られたように、何事も「国民の名において」決議する。こうした民主的な王を象徴しているのがドラマの中で示される「太陽」のメタファーである。王と女性主人公である伯爵夫人（ドラマでは髪の色からブロンドの女性と呼ばれている）との間で太陽を巡って、以下のような会話が交わされる。

ブロンド：少し質問してよろしいかしら？

王：どうぞ！喜んでお答えしよう！

ブロンド：（ゆっくりと）地球が太陽の周りを回っているとお信じになって？

王：（びっくりして）地球が太陽の周りをだつて？

ブロンド：ええ。

（静寂）

—中略—

王：もし誰かがそのようなことを主張したがために両耳を切り落とされるとすれば、それには何か真実があるということだろう。もしかすると地球と太陽の両方が回っているのかもしれない——地球が太陽の周りを、太陽が地球の周りを。

ブロンド：（微笑んで）もしかすると！

王：人生全体で常に何もかもがお互いに回っているのだ——違うかい？

ブロンド：そうね。（軽いため息をつく）。たとえば今は、あなたが太陽で——

王：いやそうじゃない、私は地球だ——（彼女は彼を目を丸くして見つめる）

[S. 534]

「太陽」は王の絶対権力のメタファーである。しかしドラマの王は、地球と太陽の両者が回っているのかもしれないと語り、自分は「太陽」ではなく、「地球」だとすら言う。中世の王であっても自らの果たすべき役割をわきまえ、王と国民とは同等・同権である、との認識の下に政治をおこなっている。ここにも先ほどの『今日作家は何を書くべきか』の中の「国家の目標はどこも国民を愚鈍にすることである。いかなる政府も国民が賢明になることに関心はない。したがってどの政府も理性に、つまり自分以外の人間の理性に敵対している。国民が愚鈍化されることを見抜いた政府は、それだけ強大となる」との言葉に見られるように、当時のナチ支配下の国家の国民に対する態度との相違を鮮明にし、そうした国家とその指導者に対する明らかな批判の念とが感じられる。

またドラマの王は騎士道精神に厚い、ヒューマニティーにあふれた好人物として描かれ、村の代表で来ている女性たちを著名な天文学者を迎えたのと同様に礼を尽くして「軽騎兵」で迎えさせているし、王の立場を利用すれば女性たちを意のままにできるのにそうしようとはしない。つまり喜劇では王マティアスの男女同権というフマニスムの啓蒙的立場はいたるところで明白に描かれ、かつ男女同権・女性解放とルネッサンスの新しい革命的理念とが結びつけられている。ホルヴァートは男女同権・女性解放と自然科学の革命を同列視して描きながら、フマニスムを歴史的運動として叙述するのではなく、根本的な人間の価値としての「人間性」を強調し、こうした「人間性」が当時のナチ支配下のドイツに欠落していることを批判しつつ示そうとしたのである。

IV

さらにこの作品が初期ルネッサンス時代を舞台としながらも、ホルヴァートが生きていた同時代の

「人種差別」の問題を鋭く追求し、かつ批判している点を指摘しておきたい。第四場で伯爵はゼレシュテ村の女性の見本の一人として宮殿へやってきた妻の伯爵夫人に、どうしてそんなことを思いついたのか、と問いつめる。その場のやりとりで伯爵夫妻の夫婦としての実体が明らかになる。伯爵は夫人を「まるで囚人でもあるかのようにお城に閉じこめて」いる。そして自分が城に寄りつかないこと、毎日酒を飲むこと、博打で負けてしまうこと、その全ては夫人が、「叔母は魔女だということで火あぶりに。母方の祖父は悪魔の処方で金を作り、叔父は地球が太陽の周りを回っていると主張して両の耳を切り落とされる」といった「呪われた人種」の出身のせいだと責める。夫人はその事実を結婚式の翌日に伯爵に打ち明けたのだった。

夫人：ああ、何度私は後悔したことでしょう。あなたにそのことを黙っていたのを。

伯爵：お前は結婚式の翌日にそのことを告白したのだ。

夫人：結婚式の前に打ち明けていたら、あなたは私とは結婚なさらなかったでしょう。

伯爵：もちろんだとも。

[S. 500]

この作品が書かれた1937年という時代状況を考えれば、ここで暗示されていることは明白である。夫人はユダヤ人の家系、伯爵はアーリア人種だとの暗示である。当時の法律では祖母・祖父がユダヤ人であっても迫害の対象だったのである。ホルヴァートは自らがハンガリー国籍であるためにナチスによって自作の上演禁止の処分を受け、さらには亡命を余儀なくされたが、偏見に基づいた人種差別がいかに誤った、理不尽な措置であるかを痛烈に非難している。さらにホルヴァートはこのユダヤ人と思われる伯爵夫人と、彼女が「呪われた人種」だということで苦悩しながらも、最後まで夫人を愛し続けた伯爵とが真に結ばれるというハッピーエンドを設けることで、人種による偏見、差別を越えるものとしての「愛」、「人間性」の素晴らしさを強く印象づけている。

さらにこの人種を巡っての議論は第七場でも夫人と王マティアスとの間でも繰り返され、しかも「正義の人」マティアス王によって一刀両断される。

王：呪われた人間がいるなんてことを信じているのかい？

—中略—

ブロンド：お願いだからもう行かせて下さいまし。警告しておきますわ。私は災いしかもたらしたくないの、いつだって災いしか—

王：魔女だとか、呪われた一族の存在などほとんど信じてはいない。

ブロンド：（王をじっと見つめて）魔女がいるなんて信じてはいらっしゃらないの？

王：信じてなぞいない。そのようなことを信じるほど私は愚かではない。

[S. 534]

さらに第七場の大団円の場で王マティアスは再度この問題に触れ、断言する：

王：呪われた人種に属しているか否かが重要なのではない。重要なのは、人種を有しているか否かなのだ。

[S. 538]

「人種を有している」とはドイツ語では“Rasse haben”となっている。このドイツ語は一般的に身分社会を表すときには「貴族に属する」という意味であるが、ここではこのドラマのコンテキストで理解されなければならない。すなわち先に述べたように王は腐敗・墮落していた総督を逮捕し、別の宮廷吏をその地位に就けている。すなわち氏素性としての「貴族」(Rasse)よりも、人間としての貴族性の方が重要なのだ、ということである。

また「呪われた人種」もここでは単に魔女のことだけでなく、多義的なメタファーとして理解されなければならない。すなわち、性の偏見や人種の偏見を含めた意味であり、そうした偏見に対するアンチテーゼとしての「人間性」の尊重ということである。この喜劇の最後を締めくくる王マティアスの台詞は

アーリア人種を「血統の貴族」とするナチスの人種的、種族的偏見、思い上がりを叱正し、ユダヤ人に対する人種差別をおこなっていたナチス・ドイツに対するホルヴァートの激しい怒りと抗議を物語るものである。

おわりに

上に見たようにホルヴァートは「人間の喜劇」で明かに祖国ハンガリーへの回帰と、反ファシズム、反ナチスの態度を鮮明にしたと考えられる。そして新しい「人間の喜劇」は、そのような基本姿勢の下に一連の作品群をなすはずであった。しかしながら1938年、小説『神なき青春』映画化の打ち合わせのためパリを訪れていたホルヴァートは事故死を遂げる。彼の追悼演説でK. マンはホルヴァートが第三帝国と決別したのは「まずはおそらく趣味の良さ(作家としての彼の名誉のために言っておくが)から、次に礼儀正しさから、単に上品であること以上のもの、つまり言葉の最も厳粛、かつ深淵な意味におけるモラルから」だった²⁰⁾と述べたが、第三帝国との決別を告げる作品群となる「人間の喜劇」は『男のいない村』、『ポンペイ』の僅か二作で終わることになった。

注

- 1) 拙稿：ホルヴァートの「人間の喜劇」『ポンペイ』—対立・変化のドラマツルギー—〔立命館言語文化研究第10号第3、1998年〕110頁以下参照。
- 2) Horváth, Ödön von: Gesammelte Werke. Kommentierte Werkausgabe in Einzelbänden. Hrsg. v. Traugott Kruschke unter Mitarbeiter Susanne Foral-Kruschke. Frankfurt a.M. 1986, Bd.11, S.227f.
- 3) Bossinade, Johanna: Vom Kleinbürger zum Menschen. Die späten Dramen Ödön von Horváths. Bonn. 1988, S. 197f. なおこの論文には教わるところが多かったことを付記しておく。
- 4) Horváth, a. a. O. Bd. 10, S.427f.
- 5) Horváth, Ödön von :Gesammelte Werke in acht Bänden. Hrsg.v. Traugott Kruschke und Dieter Hildebrandt. Frankfurt am Main.1978. Bd.4, S.466.
ホルヴァートの全集としては上記の注2)が定評があるが、この「男のいない村」に限って言えば、

上の全集では第一校が収録されており、作品のテーマである「呪われた人種」の処理、具体的には「呪われた人種」が原因による伯爵夫妻の対立、そして和解というハッピーエンド、さらには喜劇を締めくくる王の「呪われた人種」の存在を否定する台詞などを考えれば、むしろこの八巻本に収録されている改作の方が出来が良いと判断する。従って『男のいない村』はこの八巻本を底本とする。なお後の()内の数字はすべてこの八巻本の第四巻でのページ数を示す。

- 6) Kun, Eva: "Die Komödie des Menschen" oder Horváth und Ungarn. In: Horváths Stücke. Hrsg.v. Traugott Kruschke. Frankfurt a. M. 1988 (suhrkamp taschenbuch materialien 2092), S.30.
- 7) Hildebrandt, Dieter: Ödön von Horváth in Selbstzeugnissen und Bild-dokumenten. Reinbeck bei Hamburg 1975, S.12.
- 8) Hildebrandt, ebd., S.29.
- 9) Kun, a. a. O., S.42.
- 10) Kruschke, Traugott (Hrsg): Materialien zu Ödön von Horváth. Frankfurt am Main.1977(edition suhrkamp), S.42.
- 11) Kruschke, Traugott: Horváth-Chronik. Daten zu Leben und Werk.Frankfurt am Main. 1988 (suhrkamp taschenbuch 2089), S.99.
- 12) Horváth, a. a.O. Bd.1., S.289.
- 13) Kruschke, a. a. O., S.135.
- 14) Kruschke, ebd., S.135.
- 15) Kruschke, ebd., S.148.
- 16) Bossinade, a. a. O., S.191.
- 17) Krammer, Jenö: Ödön von Horváth.Leben und Werk aus ungarischer Sicht. Wien. 1971., S. 106.
- 18) Krammer, ebd., S.107.
- 19) Bossinade, a. a. O., S. 190.
- 20) Kun, a. a. O., S.30.
- 21) Horváth, a. a.O.Bd.11, S.227.
- 22) Horváth, a. a.O.Bd.11, S.227.
- 23) Ödön von Horváth. Die stille Revolution. Hrsg. v. Traugott Kruschke. Frankfurt a.M. 1981(suhrkamp taschenbuch 254), S.9.

使用テキスト

Horváth, Ödön von: Gesammelte Werke. Kommentierte Werkausgabe in Einzelbänden. Hrsg. v. Traugott Kruschke unter Mitarbeiter von Susanne Foral-Kruschke. Frankfurt a. M. 1986.

参考文献

バムレーニ・エルヴィン：ハンガリー史 1， 2
1995年 恒文社